
第4回夢洲新産業・都市創造セミナー
『いのち輝く建築と未来社会の共創
～2025大阪・関西万博にむけて～』

開催報告

一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 事務局作成

第4回夢洲新産業・都市創造セミナー
『いのち輝く建築と未来社会の共創～2025大阪・関西万博にむけて～』
開催報告

第4回夢洲新産業・都市創造セミナー「いのち輝く建築と未来社会の共創～2025大阪・関西万博にむけて～」を、2021年1月29日(金)オンラインにて、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構主催で開催致しました。経済界、学界、医学界、経済団体、行政機関等から沢山の方々にご参加いただき、盛大に開催できましたことを厚く御礼申し上げます。

第1部 講演

講演テーマ「2025大阪・関西万博とこれからの建築・社会像」

藤本 壮介 氏

**(公社)2025年日本国際博覧会協会 会場デザインプロデューサー
建築家**

建築家の藤本壮介です。昨年7月に会場デザインプロデューサーという役割をいただきました。この会場計画は非常に多岐に渡る複雑なものですが、万博協会の方々その他のプロデューサー、関西財界の方々と協議を重ねながら、ようやく昨年12月に基本計画という形で纏まりました。2025年はもうすぐです。これから実現に向け、さらに色々な設計作業等が続きますが、大阪・関西の皆様と協力しながら、是非素晴らしい万博を実現したいと思いますので宜しくお願い致します。本日は、昨年公表しました基本計画についてのご説明と私のプロジェクトのいくつかをご紹介しますと思います。



ではまず、2025年大阪・関西万博の会場デザインについてご説明します。万博の会場計画には様々な要因がありますが、特に重要となるのは、世界へ発信する理念、求められる機能性、万博ならではの特別な体験です。この3つが連動して実現する会場計画を目指しています。

まず、世界へ発信する理念ですが、万博全体には、「いのち輝く未来社会のデザイン」という大きなテーマがあります。万博を招致した瞬間から非中心・離散というコンセプトを掲げておりました。これからの社会・時代は多様性が大切であり、大きな中心に皆が向かっていくのではなく、それぞれの人がそれぞれの中心となって輝き、響き合いながら社会をつくっていくという理念が評価され、万博の誘致が行われたわけです。この非中心・離散はこれからの時代を象徴する大切なコンセプトですので、しっかりと継承していかなければと考えています。ここ最近、多様性が賞賛される一方で、時に分断が起こっていることは大変残念で、繋がりをつくっていくことで多様な社会が豊かに発展していくのではと思います、非中心・離散に加え、繋がりも考えたいと思います。繋がり合う多様性というのは、まさに「いのち」というテーマそのものと言えるのではないのでしょうか。どんな「いのち」でも1つ、1人では生きていけない、繋がり合いながら、お互い支え合いながら初めて生きていける。そういう意味では、多様なものが繋がり合うことは「いのち」そのものだと思います。多様でありながら1つである、世界が何かを共有している、そういう理念を発信していきたいと考えています。

次に、求められる機能性については、万博会場は広く、多種多様なものが共存する為、要求、要望、機能性を1つ1つ吟味しながら組み合わせ、上手く全体が機能するというミッションがあります。主要なものとしては会場内での人の動線です。大人も子供も迷うことなく楽しく体験していただけるように分かりやすくつくること、これは避難のしやすさにも繋がります。分かりやす

い動線だけれども単調で退屈にはならず多様な体験をしていただきたいと思います。日差しや雨風から人を守る根本的な機能性もしっかりと考慮しています。そして、各施設バランスの良い配置ですが、これはそれぞれの施設の役割を勘案しながら、モジュール化による効率化、混雑の緩和が非常に重要になっています。また、各国のパビリオンを平等に扱う必要があります。

夢洲は周囲を海に囲まれ護岸が巡っている為、地面の上に立つと海が見えないのを見えるようにする機能性、多様な広場の配置、会場を俯瞰する視点、具体的な細かい機能等、様々な視点からデザインを纏めました。円環状に大屋根をデザインすることで、分かりやすい動線の大きな役割を果たしています。東西にエントランスがあり、入ってきた人の流れが円環状の大屋根のところまで来て、会場全体を1周できます。大屋根なので雨風からもしっかりと守られます。基本的には大屋根の下をぐるりと1周することで全てのパビリオンを回ることができるシンプルで分かりやすいつくりとなっています。様々なイベントに使用できる水の広場は、人が大勢集中することが予想されるので人を分散させることも考えられています。大きな人の流れをしっかりと守る大屋根を造ることで万博会場全体の軸をつくっています。企業パビリオンはエントランスに近い視認性が高いところに位置しており、必ず前を通る立地を実現しています。そして、営業スペースは、食事をしたり、お土産を買うスペースで、付帯設備が入り、様々なイベントが行われる小劇場、管理施設も含めたサービスのスペースもすべて裏方で連動しています。静けさの森という150m×150mの広大な森のスペースをつくっています。万博の風景はどうしても人工的な風景で混雑しており、丸一日滞在する人が大勢いらっしゃると思うので、時には少し人々の喧騒から逃れて静かにゆっくりするところがあったほうが良いのではないかとということで、大屋根のエリアから森の方へ入れる立地となっています。森は「いのち」の源でもあるので、水の広場と森の広場、これが連動して場所として「いのち」を象徴するスペースとなっています。水の広場と森の広場を繋ぐように8人のテーマプロデューサーがつくるテーマ館があり、中央の広場を囲むように8つのパビリオンが立ち並んで、様々に個別に多様でありながら連動しているテーマ展示になっていくと考えています。広場があることにより、人の動きがダイナミズムに富んだ多様な動きをしてくれるのではないかと考えています。西側にはグリーンワールドというエリアがあり、イベント広場や営業スペース、新しいモビリティの為のスペース等が用意されています。

大屋根というのは単に機能的な大屋根ではなく、こういう風に人の動き、そのダイナミズムをしっかりつくりだし、様々なパビリオンから出たり入ったりして、常にこの大屋根の円環状の流れがパビリオンの体験と万博全体とをつなぎ合わせていく。脈動するような「いのち」の蠢きのようなものをここで実現できたらよいと思います。

そして、万博ならではの特別な体験ですが、大屋根の主要な動線によって万博の人の流れとパビリオンとの体験がしっかりと繋がる機能性を実現したが、そこに特別な体験をどう重ねていけるかと考えました。昨年の夏にテーマ別プロデューサー8人と、運営のプロデューサーの方々と会場と一緒に訪れた時に、皆でぼーっと空を眺めている時間がありました。ここに色んなものが建ち並んでも時にはふと美しい空を見上げ、その瞬間に空を共有している、空によって大勢の人が繋がりが合っているというイメージが描けました。この空は世界中で見上げている空でもあり、同じ空を地球の反対側の人や来られない人も見ている、多様な空を世界が共有している、一つの空が世界を繋いでいる、そういう体験ができるのではないかと考えました。万博会場の喧騒の中、ふとした瞬間に空を共有し、多様なものでありながら、同時に世界を共有していると感じることができる、そんな空を万博会場の中心に象徴的な場所としてつくりたいと思います。また、大屋根の上に人があがるようにしており、人の流れを分散させる役割もあります。大屋根の両側を持ち上げることによって、周りはずれ、寝転ぶと空が見え、さらに護岸で見えない海がこの場所からは見える、そんな体験を実現できるのではと思います、海と空を繋げる万博になって欲しいという願いを込めています。そして、大屋根には段々状に腰掛けられようとして、イベント等々にも使えるスペースとし、大屋根の上からパビリオンを眺め、会場全体を一望することもできます。

このように、世界へ発信する理念、求められる機能性、万博ならではの特別な体験、これらがしっかりと連動することで今回の会場計画ができあがりました。またSDGsが2025年には世界的に当たり前になり、それがまさに万博全体のテーマになります。自然素材やリサイクル活用をしっかりと視野に入れて世界にアピールし、また、世界の知見が集まる場になればと思います。70年万博は機械文明、テクノロジー等これから発展していく物質文明の頂点のようなイベントにあっ

て、太陽の塔がお祭り広場の屋根をぶち抜いて、空にすっと顔を出していました。これが非常に象徴的で、今になって考えると、太陽の塔が表現したその先の「いのち」が今に繋がっているように思います。この時は、小さな空の中に太陽の塔が一人顔を覗かせていました。これを継承し、今回 2025 年は小さな空を我々はずっと育ててきて、それが今大きな空となって連れ戻すことができた、その時には太陽の塔は1人ではなく、世界中から集まって来られる、そういうような、70 年万博から何を引き継ぎ、どう発展させていくのかという流れにおいても、この大きな屋根と空が大切になってくるのではないかと考えております。この基本計画を元に、皆さんのお知恵をお借りしながらさらにアップデートして素晴らしい万博、そしてその先の未来を実現していきたいので宜しくお願いします。



ここからは、最近のプロジェクトをご紹介したいと思います。

一昨年、フランスの地中海に近いモンペリエという街に集合住宅をつくりました。地中海は天気が良くて気持ち良く、ランチは外のテラスで食べるという優雅な気候で、外で生活するスタイルが定着しています。その伝統を現代建築で引き受け、リスペクトして未来に繋いでいくことができないかと考え、大きなバルコニーが沢山家から突き出ている提案をしたところ、地元の方からこれこそ自分たちのための集合住宅だと

喜んでいただき、無事完成しました。バルコニーは大きいものは幅 5m、長さ 8mというリビングルームのようなもので、面白いのは、他の家のバルコニーが斜め上や下に空中に沢山飛び出していて、同じように寛いでいる方と会話ができ、空中に浮かぶ村のような人間関係が生まれています。集合住宅というどうしてもプライバシーの問題があり、厳密に切り分けられている印象があるかもしれませんが、そうすると、元々人間の生活で大切だった隣近所とのコミュニティが薄れてしまいます。この集合住宅は、最先端の建築だが人間の集まって住む本質に立ち戻った場所になっており、個別で多様だけれども、何かを共有し繋がり合っていることが生活の豊かさを生み出します。これは万博の基本計画と繋がるところがあると思います。共存して繋がっていることで人々の関係が生まれて、より豊かなコミュニティが生まれ、また、外から見える開かれたリビングスペースのようなものなので、多様なライフスタイルを近隣の方も感じることができ、街と共に住んでいる意識が生まれます。これは、繋がっていることでこそ生まれる豊かさではないかと考えています。

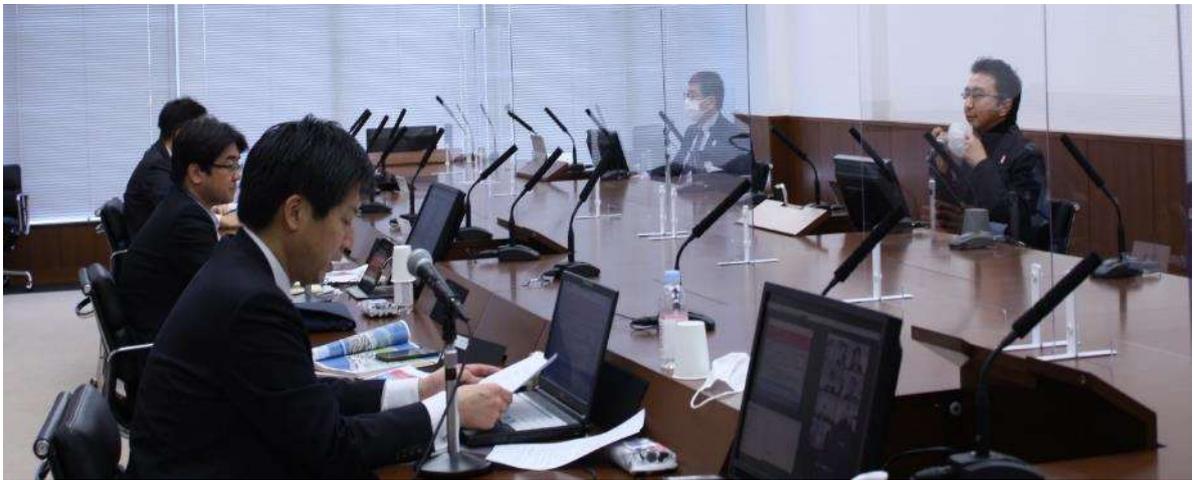
次に、昨年、横浜にできがったユニクロパークのプロジェクトをご紹介します。3 階建てにユニクロ・GU のお店が入り、壁や屋根等建物の表面が階段状になっており、そこに滑り台、ボルダリング等の遊具が設置されており、建物全体が大きな公園のようになっています。ユニクロの柳井社長が「今までにないお店の在り方とはどんなものか、クリエイティブディレクターの佐藤氏と考えてください。」と仰り、検討していく中で、効率的なお店は外には閉じて中に最大の面積を取得して四角くつくと床面積が稼げて商品の並べ方も簡単で良いが、これからの時代はお店エリア全体の価値を高めることで初めてお店の価値もより高まるのではないかと考えました。公園をつくったことで、周辺に子ども達がやってくることもある主目的みたいになり、公園は入場料を取っているわけでないが、エリア周辺全体の魅力・吸引力を高めるということにおいては、非常に有効に活用されています。これによりお店スペースがイレギュラーになるが、自分の中に閉じているのではなく寧ろ周りに開くことにより、こちらの価値も上がり、両方が良い関係になる共存の仕方がある、これも万博と先程のフランスの例に繋がります。多様なものがお互い良い影響を与えて高め合うことによって全体がより豊かになる時代に差し掛かっています。その時代の状況を象徴するような公園とお店の組み合わせが、非常にインパクトのある建ち方で実現しています。実際にここへ行ってみると、沢山の人が訪れ、子どもはずっと遊んでいて、その間にお母さん方が買い物される、こうした開かれた場所の力を感じました。

最後は東京駅のすぐ北、常盤橋に計画している超高層ビル 東京トーチのプロジェクトをご紹介します。計画中で一番高い建物は 390mという日本一の高さになる予定で、三菱地所を中心に開

発しています。ビルの上は通常風の問題があって街とは切り離された閉じたオブジェのような空間でしたが、都市空間を拡張する意味で約 300mの高さに「上空に浮かぶ都市空間、街の広場、人々のための場所を超高層に取り戻す」をコンセプトに計画しました。昼間見てみるとビルの途中の部分が大きくの口を開けているように見え、下の部分にオフィス、上の部分にホテル等、様々な複合施設があり、オフィススカイロビーに人々が共有できるような新しいパブリックスペースをつくらうと考えています。そこは半屋外空間で、風を避ける為にガラスの壁はあるが、上は抜けており、その場所に立ってみると広場のような丘のような部屋のような場所です。都市空間は地上で広がっているが、ビルの上は切り離されていいのか。そうではなく、何かと関係を持つことで人々の為の都市空間の可能性が広がるのではないかという考えをベースとしました。万博、ユニクロパークの例とも繋がりあうような新しい開かれた場所をつくるという計画になっています。ご清聴有難うございました。

第2部 座談会

〈登壇者〉



◆藤本 壮介 氏 (公社)2025 年日本国際博覧会協会 会場デザインプロデューサー
建築家

◆平沼 孝啓 氏 建築家

◆廣瀬 茂夫 氏 (一社)関西経済同友会 常任幹事 事務局長

◆深野 弘行 氏 伊藤忠商事(株) 専務理事 社長特命(関西担当)
(一社)関西経済同友会 代表幹事
(公社)2025 年日本国際博覧会協会 副会長 理事
(一社)夢洲新産業・都市創造機構 理事

進行

◆石川 智久 氏 (株)日本総合研究所 調査部 マクロ経済研究センター 所長
(一社)夢洲新産業・都市創造機構 幹事会員

石川氏:私は初めて藤本先生のパースを拝見した時、瀬戸内海へのリスペクト、70年万博へのリスペクト、お祭り広場を思い出したのですが、同時に機能面で雨風を凌げるということから、来場者へのリスペクト、人と自然へのリスペクトを非常に感じました。また、私は個人的にモンペリエの作品が非常に好きなのですが、その基本的な考え等をお聞きすることができて非常に贅沢な時間を過ごさせていただきました。有難うございます。藤本



先生は、課題という問いを再構築して、大きな視点で問い直す、そして意外なところから枠組みをつくるのが大事だと仰っておられますが、万博の「いのち輝く未来社会」という問いをどうやって問い直していくのか、そこから海と空を感じられる会場のコンセプトがどのように出てきたのか、先程のプレゼンで伺ったのですが、お話し足りないところ等あればお聞かせ下さい。



藤本氏: 万博計画は招致の時から非中心・離散という言葉が、現代の多様性を活かしながらどうやって世界をつかっていくのかというところに触れていて、凄く本質的だと感じていましたが、それをどう会場計画に落とし込むかということで、1つは分かりやすさ、風雨をしのぐというベーシックな機能性も大切です。しかし、ばらばらな世界が拡大してしまうのは勿体無い、昨今の世界で起きている分断を目の当たりにしていると、多様性を活かし合いながらも、どう上手く響き合って相互に豊かな関係を築いて繋がり合う

かというところが大きなテーマになっていくのではないかと実感していたので、その大きな枠組みを問い直して、多様でありながら繋がっているという一見矛盾するところを上手く1つに纏めることができれば非常に価値があることと考えて、そこが大きくチャレンジしたところです。

石川氏: 有難うございます。多様性を大事にしながらそれでいて皆を繋げる。矛盾しているようでそれが理想的な世界である、ということを表現されたかと思います。同じ建築家として平沼先生、どのようなご意見をお持ちですか。

平沼氏: 素晴らしい考え方だと思います。僕も藤本先生も70年万博を知らない世代ですが、きっと素晴らしかったのだらうと思います。そうすると、是非、次の50年後に向けて藤本先生のコンセプトを実現し、受け継いで欲しいと大阪人ながらに凄く期待しています。それはやはり僕達は建築の話になりますが、丹下さんのような建築家がいらして、その方が素晴らしい万博を開催されたことが1つの夢だったり希望だったりして建築に向き合ってきた、その造営を繰り返していくような、また建築を目指していくような学生が増えて後進が育っていくのもまた楽しいと思います。



石川氏: 私も70年万博を経験していない世代なのですが、だからこその世代に伝えたいという気持ちがありますよね。70年万博をご存じの廣瀬さん、いかがでしょうか。

廣瀬氏: はい、70年万博確かに見ました。親父に連れられて一度だけ。今、あの時に駄々をこねて連れて行ってもらって本当によかったと思っています。先ほどからコンセプトをお聞きして、夢洲以外の場所、例えば千里や花博会場だった鶴見緑地だったら、海と空でなく、水と緑だったのではないかと思います。今回は臨海部ということで海と空にスケールアップした。出展するパビリオンもストライクゾーンが広がったんじゃないでしょうか。場所に力があるということは前から感じておまして、その場所の力を人間がもらう。夢洲の力を何も無いところからつくっていく。そのところの建築のコンセプトが今回はっきり出たと思っています。70年万博の場合は活気です。テーマは「人類の進歩と調和」でした。今も千里の万



博記念公園を囲む外周道路には「進歩橋」と「調和橋」という 2 つの橋が架かっています。橋の名前を見れば、車でぐるぐる回っているだけでも、人間は活気を感じることができるわけです。そういったものを今回も残していく事業なんだろうと。夢洲に来たら個性を持ちながら 1 つなんだ、我々は世界人・人類なんだと、来訪者がそう感じる万博にして欲しいし、そのコンセプトを充分活かした建築設計になっていると思いました。

石川氏:確かに場所の力ってありますよね。建築家というのは場所の力を体現するシャーマンのような存在かもしれません。深野さん、どのようにお感じですか。

深野氏:なんだか生きている化石のように感じています。一番最初に万博の場所に行ったのは 1968 年くらいで小学校の社会科見学で連れて行ってもらいました。一面竹藪になっていて、そんなところに本当に万博会場ができるのかと思っていましたが、実際見に行ったらその頃の面影はない、もともとあった場所の雰囲気が変わってしまったのを寂しく感じました。それと同時に月の石はやはり印象的で、宇宙の関係の展示も当時科学少年だったので鮮烈な印象がありました。やたら人が多かったこと、70 年独特のチープな雰囲気、そういうものが万博として頭に残っています。



石川氏:万博関係の仕事をしていて良いと思うのが、経験した人としていない人とで議論ができることだと思っているのですが、それをどうやって形にするのか、今最初に形にしたのが藤本先生。色々な人の話を聞いて形にした、それがリング状の主動線、大屋根、静けさの森等と思いますが、それに込めたメッセージをもう一度お聞きしたいので、さらに図面を深堀りしていただければと思います。

藤本氏:最初にこの場所を訪れたときに、ただひたすらに広い、今本当に何もなくて感動的なくらいで、そうすると、逆に六甲の山並みや瀬戸内の海、空の青が際立っていて、海に囲まれ遮るものが何もない、まさに場の力、これはやはり特別な場所だと感じました。でも護岸に囲まれていて海を近くに感じられない、場所のポテンシャルを最大限に引き出してあげたい、人々が訪れた時にそれを感じさせてあげたい。そう思って大屋根を歩くときに、そこに佇んで寝転ぶ、するとそこに居るときは万博会場にいるというより大阪湾にふわっと浮かんでいるような、喧噪の中で空と海と自分しかいない、場所と繋がれる感じになるのではないかと考えています。

石川氏:昔読んだ藤本先生のインタビュー本で、ル・コルビジェのインドのチャンディーガールへ行った時の話で、自然と上手く調和していることを書かれていて、それを忘れて欲しくないと思っていましたが、今回の計画でやはり忘れていなかったんだと、嬉しく思いました。

藤本氏:コルビジェはインドに大きなまちをつくったのですが、中央通りがどこに突き当たるか、普通は自分の建物やモニュメントをそこに建てるのですが、コルビジェは元々地元の人がずっと見ていたヒマラヤの山を道の向こう側に見えるようにした。敢えてそこに視線が向くように。地元の人が培ってきた自然そのものをしっかりとリスペクトすることが大きな感動を生むの

だと実感し、今回の夢洲についても不思議な人工島であってもつくられたら場所のアイデンティティを持ち始める。忽然と現れた島、そのことを体験、実感できる場所は尊いと思います。

石川氏: 廣瀬さん、いつもは NCB から瀬戸内海を望んでいらっしゃるわけですから、何か感じるところがあるのではないのでしょうか。



廣瀬氏: 別の話になるかもしれませんが、今回のパースを拝見して、真ん中に広場があり、よく見たら静けさの森となっている。70年万博人間からすると、外周道路があって太陽の塔・お祭り広場が真ん中にあった。真ん中が中心と思っていたら、今回は真ん中に静けさの森があって驚きました。周りに非中心リングがある。面白い発見だなと。真ん中に目を向けるのではなく外に向けるのが印象的なデザイン。そして、きっと皆の印象に残っていくのは静けさの森ではなくリングで、大屋根はきっと

誰かがニックネームを付けるのではないか。例えば競輪のバンクみたいだからバンクとか、インディ 500 のコースみたいだからインディとか。印象に残っていくのはあだ名かと、でもこれは中心性が出てくるから良くないのかもしれませんが。そして、藤本さんが描かれた人間がどう動くかプロットした赤い絵をみて、まさに万博のロゴそのものに見えて、あれを例えばデータ化してスマホに写して、「今日はロゴに近くなったね」とか言ってやってみたら面白いんじゃないかと思います。

藤本氏: ロゴが発表になった日に見て、これは本当に「いのち」の万博を象徴していると感じました。その時、動線は既につくっていたのですが、ただの線だったので違うなという感じがありました。ロゴを見て、これだなと思いました。一見ただの円ですが、そこには来場した方が色々な風に動き回れて、生き生きと脈動するロゴのような風景が生まれたら素晴らしいのではないかと思います。ロゴを見ながらあの絵を描いたので、伝わって本当に嬉しかったです。

廣瀬氏: 是非軌跡を元に実現していただけたら。それと静けさの森。森って面白いと思いついて、日本の定義では「森」は自然に「盛られた」もの、人間が「生やし」たのは「林」ということで、ここに森をもってきたのは人工物だけど自然だよ、という意味なんだろうと思います。ぜひ鬱蒼としたものをつくって、自然を肌を感じるものにしていただけたらと思います。

藤本氏: あの森は最初は機能的に動線のところをつくって、そこにパビリオンを寄せていくと真ん中が余ったのです。それも非中心・離散という意味では良いと思いました。またある意味では、周りに広がっている喧騒人工物で賑わいのあるものと逆のものを入れることで、不思議な、言ってみればお祭り広場の屋根を太陽の塔が突き破ったような、この大きな会場をまた大きな自然に近いものが真ん中であって、未来を、どういう未来になるか分からないが、予感のようなものになれば良いと思いました。私は北海道で育ったので森の思い入れが深く、理想化された森かもしれません。テーマプロデューサーの中でも、森を喜んでくれる人や、一方でこれくらいの規模じゃ本物の森にならない等、色々な意見が巻き起こっています。でも森があることによって、「いのち輝く未来社会のデザイン」というもう 1 つのテーマ、違う層、レイヤーができたと思っていて、あれをこれからどう実現するのか、鬱蒼とした森をどうつくり、どう利用してもらえるかを皆で議論しているところです。

石川氏: 平沼先生は今の議論を聞いていかがでしょうか。

平沼氏:大阪は東京に比べて緑比率が約半分くらいとされています。その中で夏をメインとした万博ということで、周りの海があっても保熱がされる、そこの解決策として静粛な森を位置づけた。明治神宮の森が100年祭にあたるのですが、あのような都市圏にあるような熱環境を調和するような森になる可能性を含める、海だからこそ温度が鎮まるわけではなく、高温多湿な大阪の地熱さえも拾ってくれるのではないかと思います。また、大屋根と仰っているが立体型遊歩道デッキであり各パビリオンから立体的にアクセスできるようなプロセス装置になっており、同時に万博会場を一望できる場所でもあるというのは流石だと思います。お聞きしたかったのですが、藤本先生の卒業設計が今回のコンセプトデザインに似ていると先輩から聞いたのですが、それを引き継いでいるのでしょうか。



藤本氏:似ているといえば似ているし、違うといえば違う。卒業設計はもっと規模が小さいのですが、東京の銀座のまちの上に 80m×80m くらいの正方形が浮いているような設計で、銀座の中央通りの上に浮かべて、その中庭が広場になって隣の間道とも繋がっていて、建築と道と都市的な広場とまち、色んなものが融合する新しい場所の提案でした。何かフレームが浮いているという意味では似ているのかもしれないが、あれから約 30 年経っているが、今回はもっと広くあの場所に根差し、時間の流れ、過去から未来というものまで考えを拡張しているという意味ではしっかり成長していると思います。

石川氏:銀座という場所でインスパイアされてつくられたのかもしれないですね。今回は夢洲という土地を感じて進歩させたということから、繋がっているし、進歩しているのかと思います。



藤本氏:他の 8 人のテーマプロデューサーと話している中で、色んな「いのち」、これからの社会というものを巡って色んな議論やアイデアがある中で、インスピレーションや色んな刺激を受けて、その中で自分の考えが深まり発展していきました。現地を訪れた時に皆「やっぱりこの空は凄いね」と思わず口々に言っていて、僕が空を思い付いたのではなく、皆で見に行ったことでそのことに気付いたので、1 人で何かをつくるというより、いくつもの個性と才能が共鳴し合うことで生まれたような気がしています。

石川氏:今回の万博はリアルとバーチャルの両方とよく言われるのですが、やはりリアルの会場の役割において、建築の仕事は非常に大きいと思っています。リアルな会場の役割についてどういう風に定義されますか。

藤本氏:難しいですね。バーチャルの万博会場が構想通りに上手く動き出すと、恐らくバーチャルの人の人が多いはずですが、リアルは引き続き価値を持ち続ける。個別に印象的なパビリオンは当然記憶に残っていくが、何気ない風景みたいなものも含めた全体の万博体験がどこか記憶に残っていて、20 年後くらいに思い出したときに、例えば大屋根の上をぶらぶら歩いている、そういう一瞬の風景を思い出す。人間の記憶に残る時に、ある非常に強い何かだけでなく、個別のその場所ではか持ちえないささやかだけれども尊いものがリアルの世界には沢山溢れている。そういうところを丁寧ににつくっていきたい。ものはそのものというより、例えば空は毎日違

う、1 時間でも表情が違ふ、空、天気、風の音等の自然が持っている多様性、その場所の一瞬一瞬のような気がしていて、それをしっかりリスペクトした上で万博の風景と噛み合わせることでその一瞬一瞬が価値を持つ、そういう場所になることを期待しています。

石川氏:確かにその場所でないと残らない記憶がありますね。それを実現するのがリアルの場の力、建築家の力かもしれません。藤本先生の話聞いて、色んなプロデューサーの方々の思いを全部聞いて初めて藤本先生が形にされたという意味では、横串を通していただき有難うございます。最後に今日の感想と最後に藤本先生に是非聞いておきたいこと等、平沼先生お願いします。

平沼氏:生活社会に影響を与えているコロナ禍で、波形がきつとこの万博が起点となると考えて、大阪万博が失敗すると大阪はもう無くなるのではないかと、でももし成功させたら日本を引っ張っていける、世界にも元気をあげることに繋がると思います。大阪の方々の力が重要になります。日本全国からも沢山応援をいただけたら、日本を中心としてアジアの人々への励みを与えられると思っています。是非、藤本先生がつくられる万博会場、皆さんの力で運営されていくものを成功に導いて欲しいと願っています。

石川氏:本当に大阪にとって 50 年に 1 回のチャンスと思って頑張らなければ、藤本先生はじめ全国の人が一生懸命して下さっているわけで、是非とも我々もさらに協力していきたいです。廣瀬さんいかがでしょうか。

廣瀬氏: 今回のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」ということで、これには大変深いものを感じております。幸せ、「いのち」が輝くとはどういうことか、70 年万博からは定義が変わってきた。物が無い時代からある時代へ、飽食の時代になり、選択肢がある方がよいよねという風になってきた。これが 1980 年代後半。しかし、何でもある時代、選択肢が溢れる時代に入ってきて、また幸せってなんだ、という話になっている。幸せの中身が変わっているわけです。今の若い人にとったら、人の役に立つとか、自己実現とか。これから 30 年先を考えたときはどうでしょう。万博プロデューサーの石黒氏によると、機械に近づく人間・人間に近づく機械。落合氏によると計算し尽くしたものは自然と変わらない。となると一体幸せってなんだろう。生きるとは、死ぬとは、殺すとは。随分深いテーマです。しかし、このことを我々日本人は日本書紀のころから長い歴史の中で考え続けてきた。色んな角度から考えられる良い土地ではないかと思っています。万博は 2025 年で終わるが、社会のデザインを実現していくのはその先です。関西には礎があります。色んな産業が関わる、「いのち輝く社会」が実現されている、これが関西でできるようになれば世界中からリスペクトされ我々も世界に貢献できるだろう。ここを掘り下げていけるのを楽しみにしています。

石川氏:各プロデューサーがされていることは問題提起であって、それを大阪でどう形にし、どう実現していくのかということだと思います。最後に深野さんお願いします。



深野氏:この場所というのは特別な場所とされていて、ここから遣唐使が出発しました。この場所に立つと六甲の山並みや海が見える。日本の国が形成された上で海が重要な役割を果たした土地で、海を中心に感じられる素晴らしい場所です。前の万博は場所の力という要素は若干薄かったように思うが、今回はそれを強く感じられる。大屋根というのも日本の伝統建築に乗っ取っているように思います。昔のお寺や神社の回廊の中にあるものは特別なもの、つまりこれも特別な場所だと周りにそれとなく分かってもらう為の特別な

仕組みかと思います。森も重要で、鎮守の森というようなものかと。太陽の塔がああ場所に残されたように、是非この森も残してもらいたいです。

石川氏:確かに森も印象的でどういう形で残るか、興味があるところだと思います。皆さん色々な意見が出ましたが、藤本先生総括お願い致します。

藤本氏:本当に有難うございます。まさにこれから4年かけていくわけですが、あつという間と思いますが、できる限り努力を重ねて皆でつくり上げるものだと考えています。深野さんの話にあったように、遣唐使が出発していった、奈良出身のプロデューサー河瀬さんも仰っていたが、20世紀につくられた人工の島という理解では追い付かない、背景がしっかりした場所と感じています。そういう場所に万博という形で世界中から人が集まってきて物理的に1つの場所に存在しているということは、インターネット社会で本当の繋がりの実感が無くなってきている時代において、素晴らしい貴重な機会と思っています。21世紀に万博をやる意義を含めて象徴的なタイミング・場所だと思います。だからこそ素晴らしい万博にしていきたいので皆さん、これからも引き続き宜しくお願いします。



石川氏:今回の藤本先生のパスによって、万博が分かりやすくなったと思います。空と海の青色、ぐるぐると蠢くロゴマークの赤色、先生の建築で基本となる白色、大阪うめきた2期等で大阪に増えてきた鎮守の森の緑色、このように大阪に彩を加えて下さいました。先生のパスが地図となり、また言葉も加えていただきより立体的になりました。これからどんどんプロジェクトが加速していくでしょう。先生と協力したいという方が今日から沢山出てくると思います。そうした方々と協力して大成功目指して是非進めていきましょう。

素晴らしいパネリストの方々も的確なご意見有難うございました。